

白兔が神となり、剣姫
を育てる話。

幻桜ユウ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、僕が幾多の『冒険』を越えて、神へと昇り詰めたそんなお話。ではなく、神になった僕が愛してやまないアイズの【眷属ファミリア・ミイの物語】を見届けるお話。

この作品は一応、『白兔は理想を抱え、幻想へと走る』の番外編ですが、本編を見なくても十分に分かると思います。

目次

第一話	僕の娘は可愛い	1
第二話	特訓です	10
第三話	癒しと追憶	19
第四話	昔話	29
第五話	美しき花には棘がある？	37
第六話	夢はまだ夢のままが良い	44
第七話	始まるわけないだろうこの野郎	49

第一話 僕の娘は可愛い

「神様！ 早く早く！」

「そんなに急がなくてもオラリオもダンジョンも逃げないよ」

「はい」

僕の名前はクラネル。えっ？ ベル・クラネルじゃないのかって？ いやまあ、本名はそうなんだけど、一応、超越存在デウスデアに至ったから、ベルが消えて、一応、建前上ではクラネルと名乗っているんだ。至ったと表現するのは理由があるんだけど、それは追々話すでしょう。

そして、僕を引っ張って早く行こうとせがんで来るのはアイズ・ヴァレンシユタイン。金髪金眼の美少女で、育ての親としては目に入れても痛くないぐらい可愛い。親バカだった？ そんなの自覚してるさ。

11年前……って言っても分からないか。アイズが5歳の時、僕はこの子をダンジヨ

ンの中で見つけた。

当時は大分ゴタゴタしていたから、眷属が少なくそれなりの強さを誇っていた僕が引き取る事にした。(他にも理由はあるけど)

そして、山奥の家でひっそりと暮らしていたのだが、アイズがオラリオに行きたい！
と言っていたので、恩恵は既に与えていたため、改宗を可能にしようとしたのだが、アイズは神様も一緒に行こつ！
と言うので、僕はついてきたのだ。正直、めっちゃ嬉しかったのは内緒。

「神様、次は私達だよ？」

「えっ？ あつごめんね」

そうしている内に、検問の番が来たようだ。

検問をしていた「ガネーシャ・ファミリア」の人が僕を見ると、驚いて頭を下げた。
あつ、少しは顔を隠すべきだったか。

「これは、クラネル様！ お久しぶりでございます！ 此度はどのようなご用件でこちらへ？」

「ああ、うん。頭を上げて。ここに来たのはこの子の付き添いでね。この子が冒険者になりたいてって言ったから、僕も主神として付いてきたのさ」

僕はアイズの頭を撫でながら、そう言う。

アイズは頭を撫でられてとても嬉しそうだ。可愛い。

「なるほど！ では、どうぞ、お通りください。嬢ちゃんも頑張れよ！」
「はいー！」

そうして、検問の人に見送られながら、僕達はオラリオへと入った。

最初にやってきたのはギルド。

ここでアイズの冒険者登録を行う。

オラリオには他にも僕の眷属はいるし、担当アドバイザーはいなくて良いかな。

「クラネル・ファミリア」の名前を出した時はすごく驚かれた。

今も、あの子達は活動しているだろうに。そんなに驚くことかな？

そう口に出すと、受付嬢は「そう言う問題では……いえ、貴方様の鈍感さは皆知るところですから、言っても無駄ですね」と変に納得されてしまった。解せぬ。

アイズの冒険者登録を終え、僕達の本拠地ホトの『鐘楼の館』に行く。
そこで待っていたのは、

「あつ！ クラネル様！ お帰りなさいませ！」

メーテリアと、

「やっと、帰って来たのか」

アルファイアの二人だった。

二人はオラリオの最強姉妹だと言われている。

メーテリアは『寂静』、アルファイアは『静寂』の二つ名を持っていて、どちらもレベル7の冒険者。

この子達はアイズよりも早く出会い、二人とも病気に蝕まれていたため、ある方法を使つて二人の病気を抑えた。あくまで、抑えただけだったのだが、二人がランクアップを重ねて、病気を打ち消すスキルを手に入れた。どちらも同時期に手に入れていたから、姉妹なんだなあと思いながら、ステイタス更新をしていた記憶がある。僕が二人との出合いを思い返していると、アルフィアが口を開く。

「アイズ。久しぶりに会つたんだ。昔みたく、相手をしてやろう」

と、不敵な笑みを浮かべて言うので、アイズはメーテリアの背後に隠れてしまった。

そこは僕じゃないのか、アイズよ。

と言つても、アイズは「アルフィアお姉ちゃんもだけど、神様も結構厳しい」なんて言われてしまった。

僕、そんなに厳しくしたっけ？

そして、自分の背中で縮こまるアイズを撫でながらメーテリアも口を開く。

「はいはい。お姉ちゃん。アイズちゃんもクラネル様も長い移動で疲れているんだから、今は休ませましょう？」

「アイズはもうレベル5で、クラネルに至ってはもはや、心配するのも烏滸がましいくらいだぞ?」

「もう! そうじゃないの! お姉ちゃんだって、クラネル様に甘えたいでしょ? そのための時間!」

メーテリアの言葉に一気に顔を赤くさせ、僕とメーテリアを何度も交互に見て、反論する。

「そ、そんなわけないだろ! 誰もこいつに甘えたいなんて言っていない!」

グサッ。

ふ、深く言葉の槍が胸に突き刺さった……。

僕は分かりやすく落ち込み、アルフィアは慌てて弁明する。

「ち、違うんだ! 別にクラネルに甘えるのが嫌ってわけじゃ!」

「良いんだよ、アルフィア。どうせ、僕は大事な眷属をオラリオに置いて行ってしまった愚か者だよ……」

「それもそうだな」

急にガチトーンで僕の卑屈を肯定したアルフィア。さらに心にダメージが……。

「確かに、クラネルは天然でお人好しで無自覚女だったらしで救いようもないほどの馬鹿だが……」

「ゴフツ」

やめて！ 僕のライフはもう0よ！

「それでも、私はあの時、お前に救ってもらった事に感謝している。正真正銘、私達はお前の優しさに救われたからな」

「アルフィア……」

「だから、お前はそのままできてくれ」

「うん」

ありがとう、アルフィア。でもね、

僕を落とした張本人が言うことじゃないと思うんだ。

第二話 特訓です

「いただきます」

今、僕たちは夕飯を食べている。

メーテリアが作ってくれたのだ。

ちなみに僕もアルフィアもアイズも料理できる。

しかし、どうしてもメーテリアの腕には負けるので、僕たちの中ではメーテリアが料理することになっている。メーテリアは嫌がらないし、むしろ進んでやってくれる。

何年前かに「メーテリアは良いお嫁さんになるよ」なんて言ったら、メーテリアが「お、お嫁さん!? えへへ、私が神様のお嫁さん」とか言っていた。びっくりした後、頬を朱に染めながら、何かと小さく呟いていたためよく聞き取れなかったが、その時アルフィアとアイズが不穏な空気を発していたので、そのままにした。

そういえば、アルフィアとアイズが料理上手になったのって、その頃ぐらいだったか

なあ？

アルフィアは才能があつたが、アイズは最初危なかつた。

包丁を剣のように持つわ、何でも強火で焼こうとするわ、塩を入れすぎたら砂糖を入れようとするわ、典型的にダメだつた。

流石に見ていられなかつたので、僕は二人羽織のような形で指導した。その時、アイズはずっと顔が真っ赤だつた。どうしたんだろうね？

翌朝、僕達は庭に出ている。

まあ、もちろんアイズ達を特訓するためだ。

そう、『僕』が『アイズ達』を特訓するのだ。

僕は準備体操して、木刀を手に取る。

木刀ではあるが、世界樹の枝を削って作ったものだ。丈夫さは折り紙付きである。

数度木刀を振り、感触を確かめる。

うん、問題ないかな。これならレベル10までなら捌けるかな？ 流石にそれ以上は

真剣を使わないと無理かな。まあ、レベル7が2人とレベル5が1人だから問題は無いね。

つと、どうやら3人共来たようだね。

アイズは僕と同じ木刀を持ち、アルフィアは素手、メーテリアは杖を持っている。

アイズは純粋な剣士。

アルフィアは体術を併せ持つ魔道士。

メーテリアは攻撃、支援の2つを極めた魔道士。

前衛、中衛、後衛にしっかり分かれている。連携も凄まじいし、正直、下手に人員を追加するよりもこの3人でパーティを完成させて良いとも思える。

「3人共準備は良いかい？」

「はい！」

「ああ」

「よろしくお願いします」

「うん。じゃあ、始めようか」

僕は始まりの合図を出したのと同時に殺気を放つ。

3人はもう慣れたかのように僕の殺気に怯まず、各々の行動を取る。

アイズは正面から突進してきて、一点からではなく多方面から、すなわち連撃離脱の精神で攻撃して来る。

アルフィアは自身が放つ魔法にアイズが巻き込まれないように常に動きながら場所を移動する。

メーテリアは他2人と僕の動きを観察し、並行詠唱もしつつ、僕からは見えない位置に常に移動する。

うん。3人共、僕に対する対策をしつかり組んできている。

この特訓のルールは

1. 僕は「魔法」も「スキル」も使わず、3人は使用可能。
2. 3人の攻撃が僕に一度でも当たると特訓終了。ただし、時間による。
3. 時間制限まで3人は何度も倒れても良いし、何度も挑んできても良い。の主に3つである。

さて、そろそろ疑問に思う頃だろう。

何故、僕は神でありながら、3人に特訓をつけられるのか。

理由は単純。僕は元冒険者だからだ。いや、ある意味今も冒険者だ。

僕は冒険者でありながら、『恩恵』を神まで昇華させた。

つまり、ランクアップを続けて神の領域まで上り詰めたのだ。

それに伴い、『恩恵』は消失したから、かつての冒険者のような力は完全になくなった。

しかし、今まで身に付けてきた『技術』は体に染み付いていて、全知零能の僕でもレベル10までなら木刀で捌けるのだ。

アイズの猛攻を全て木刀でいなし、アルフィアの見えない音の魔法も木刀で切り裂き、メーテリアの支援魔法をも超える力で3人を木刀で叩く。

僕は人体の構造は熟知している。

何処をどれだけの力で叩けば、気絶するのか全て分かっている。

だから、僕が3人を木刀で叩けば、3人はすぐに気絶する。

ちなみに、痛みを感じさせないために一瞬で意識を刈り取っている。さて、そろそろ3人の合計気絶回数が10を超えた辺りかな。

「3人共、まだ続ける？」

「続ける！」

「当たり前だ！」

「行きます！」

うん。3人共、心は全く折れていない。

『冒険』をする上で大事なものは「ステイタス」でも『技』と『駆け引き』でもない。

『心』だ。『覚悟』だ。『勇氣』だ。

「結局の所、最後に生死を分けるのは『心』。

だから、僕は3人に絶望を与え続ける。

圧倒的な力をもって、3人を叩きのめす。

さあ、今日はいつまで続くかな？

「お疲れ様」

「ハアツ、ハアツ、ハアツ」

3人は地に倒れながら、激しく呼吸を繰り返す。

うん。前より長く続いている。

アイズは僕の『最速かつ見えないかつ間合いを超えた斬撃』にもだんだん対処ができてる。剣の技術は上達しているし、体術も鋭くなっている。他2人とはアイコンタクトで連携を取り合っていて、僕に作戦を読ませないようにしていた。アイズ自身の『技』も

よく洗練されていて、このままいけば、レベル6相手でも勝つことができるだろう。

アルフィアは常に動きながら、僕に魔法を浴びせて来る。僕の見える所でたまに口元を隠しながらフェイントを混ぜて来るため、アイズのための隙を作らせようとしていた。魔法の制御はもはやピカイチで強弱をつけて本命の攻撃を隠したり、限りなく圧縮したものを飛ばし僕にワザと斬らせる事で爆発させたりと多彩な攻撃を披露していた。

メーテリアは魔法で僕の五感を奪っていた。それ以上に木刀を持つ感覚すらも奪っていたため、途中から少し本気を出さざるを得なかった。まあ、僕は3人の動き方を完全予測できたから、あまり意味はなかったかもしれないが。でも、並行詠唱の精度は上がってたし、2人に指示を出しながら、よく動いていた。指揮は悪くなかったし、『勇者』^{プレイヤー}君には届かずとも後衛としての務めは果たしていた。

うんうん。3人共しっかり成長していて、僕は嬉しいよ。

それらを3人に伝えると、

「やっぱり、神様の特訓が一番キツイ」

「しっかり痛めつけるだけ痛めつけて、終わったら素直な賛辞なのだから、タチが悪
い」

「お姉ちゃん。甘えたいなら、甘えたいってちゃんと言えば良いのに」

と、三者三様の言葉が返ってくる。

よしよし、後で幾らでも甘えてくると良いよ。

僕は3人に回復薬ポーションを飲ませ、3人と館へと帰るのだった。

ちなみに館に戻った後、3人が僕に抱きついて全く離さなかつたのは別のお話。

第三話 癒しと追憶

「じゃあ、神様行ってきますー！」

「ああ、行ってらっしゃい」

ダンジョンへと向かって行ったアイズを僕は見送る。

いくら強い僕でも、神だからダンジョンに潜る事はできない。

だから、僕は『鐘楼の館』でお留守番である。

アルフィアとメーテリアもダンジョンに潜ったため、僕は一人である。

いつもならば本でも読むところだが、久しぶりにオラリオに戻ってきたのだから、街を散歩するのも良いだろうと思った。

という事で――

「僕の退屈を殺してくれ給え、エレン君」

「おい、お前まで俺をそう呼ぶんじゃない」

我が神友のエレン君——もとい、エレボス君の元へやって来た。
場所は孤児院。

このエレボス君は過去にオラリオに闇派閥イツイルスを引き連れて襲ってきたが、僕の眷属達に一日の内にボコボコにされた邪神（笑）。

とりあえず罰として、孤児院に奉仕活動させている。もちろん僕の提案である。

「いやいや！ 邪神（笑）君にお似合いではないかい？」

「お前え！ 本神当にこつち寄りになりやがって！」

「神ですから（キリツ）」（、・ω・）

「キリツ、じゃねえ！」

「あつはつは！ いやゝ。ベル君。完璧にエレボスを手玉に取っているねゝ」

エレボスで遊んでいると、ヘルメスが笑いながらそんな事を言ってくる。

神友だからね！（キリツ）

えっ？ どうしたの、エレボス？ えっ？ ウザイって？

シユン……（——）

あつでも、神友を否定しないのは素直に嬉しいよ！

「いやゝ。それにしても、こうして二人を見ていると本当に声そっくりだ！ 姿は完全に真逆なのにね！」

「そりや、中のひて——「おいバカやめろ」——へい」

さて、世界の裏側の暴露は止められてしまった。

ちなみに僕の格好は真つ白。エレボスは真つ黒である。

正反対である。担当する声ゆ——（バシンツ）——痛い。

「あつ、そうだ。ヘルメス。今のオラリオについて教えてくれ。昨日着いたばかりだから、何も分からないんだ」

「そりや、良いともさ！ まずは——」

僕はヘルメスから——たまにエレボスからも——今のオラリオについて教えてもらった。

ふむふむ、つまりは――

ぶっちやけ平和なのね。

そりやそうか。

黒竜は僕が倒しちやつたし、闇派閥イヴイルスも壊滅。

ダンジョンは最下層まで攻略され、古いにしえとの決着は果たされた。

もはや、現存する危機は全て無くなった。

あとは僕達神では図り知れない『未知』だけ。

なるほどねえ。

よし、する事無い。

平和なのは良いんだけど、する事が無いのも問題だなあ。

と、いう事で、現在【アストレア・ファミリア】の『星屑の庭』にお邪魔させてもらってます。

で、アストレアに膝枕されてます。

流石は『膝の上で寝たい聖母女神ランキング一位』！ 中々に良い！

ちなみに本人曰く「全くもって嬉しくないランキングね」と言っていたが、これはクセになる！

「今更だけど、僕を膝枕して良いの？」

「本当に今更ね。別に良いわよ。他の男神は絶対ダメだけど、貴方になら構わないわ」
アストレアは僕の問いにふつと笑いながら答える。

中々に嬉しい事だ。

というか、みんなは僕の事を鈍感だのなんだの言うが、僕は別に鈍感ではない。これ

でも、アイズ達が僕に好意を寄せている事ぐらい分かっている。決して、ミアハやタケミカツチのような朴念仁ではないのだ。

なんなら、意外と女神からも好かれている。

今、僕を膝枕してくれているアストレア。

都市外で活動しているアルテミス。

たまに僕を神聖浴場に連れて行こうとするデメテル。

バベルの上からよく見てくるフレイヤ。

等々、女神からも好かれている。

男神から嫉妬が来るかもしれないが、あまりない。

まあ、さっきのヘルメスやエレボスを見ていたら分かると思うが、僕は男神とも仲が
良い。

エレボス、ヘルメス、ニョルズ、ミアハ、タケミカツチ、ガネーシャ等々。

アポロン？ アイツは知らん。

アイツは僕を見るたびに「ベルきゅ——ん！」と突っ込んで来る。僕はクラ
ネルだ。と何度も言うが、止める気配はない。いつも突っ込んで来るアポロンを手刀で
気絶させ、よく護衛としているヒュアキントス君に預けている。……毎度「我らの主神
がすまない」と謝ってくるので大変だねとよく労っている。

全く、僕に男色趣味は無い！

僕は生粋の女の子好きだぞ！

あの変態神ゼウスに英才教育洗脳を施された僕だぞ！

いや、本当にあの変態神はなんて事してくれただんだ。

貴方の教育のせいで僕はこんな悪い子に育ってしまったんだ！

小さい頃から僕にあらゆる事を吹き込みやがって！

そう考えていると、なんだか怒りが湧いてきたので、癒しを求めてアストレアに抱きついた。

アストレアは仕方のない神ねと苦笑しながら、僕の頭を撫でる。

アストレアほんと好き。

とりあえず、僕の司る事物に『好色』を混ぜやがったあの変態神には近々ヘラにここ最近の悪事をチクらせてもらおう。

アストレアの膝枕とよしよしに癒された僕は『鐘楼の館』に戻る。

そして、自室に入り、机に向かって椅子に座る。

そして、一冊の白い本を開き、真っ白なページにペンを走らせる。

内容は今日一日の出来事。

つまりは日記だ。

アイズを拾ってからやり始めたものだ。

アイズ達の成長記録でもあり、僕の軌跡でもある。

ああ、だとしたら、『アイズを拾ってから』はおかしいか。

正確には『アルゴノウトとして英雄を目指した時から』か。

『英雄日誌』とはまた違い、『観察日記』を兼ねたものだ。一時期ではあるが、破り捨ててしまいそうになった時以来、僕はそれを書かなくなつた。

もう『古代』からずっと生き続けて、ただただガムシヤラに強くなり続けた。

何故か歳を取らなくなつてしまつた僕はアリアドネ姫達を亡くし、自暴自棄に落ちか
けていた。

いつの間にか、ミノタウロスとの戦鬪で失つた視力も戻り、途方もない月日が流れた。

天界から神は降臨し、時代は『英雄時代』から『神時代』へと移行した。

そして、僕はゼウスと出会つた。

お前の姿をずっと見ていたと言われた。

お前が一番の英雄だと言われた。

だから、儂の「ファミアリア」に入らんかと言われた。

何の目的もなかつた僕はその提案を受け、ゼウスの最初の眷属となつた。
それが第二の僕の始まりだ。

第四話 昔話

僕が「ゼウス・ファミリア」に入った後、神ゼウスに『恩恵』を刻んでもらった。最初はレベル1から始まる。

これに例外は無いそうだ。

ただ、僕の真名が変化していた。

それは「ベル・クラネル」。

「アルゴノウト」から「ベル・クラネル」に変わっていた。

いや、もしかしたら、最初から「ベル・クラネル」だったのかもしれない。

「アルゴノウト」なんて名前は存在しなかったのかもしれない。

それは親にでも聞かないと分からないことだが。

そして、神ゼウスと相談した。

何故、僕は歳を取らなくなったのか？

これからどうするべきか？

前者の方は確実性は無いが限りなく正解に近い結論が出た。

それは【疑似神格化】とも言えるものらしい。

【疑似神格化】というのは主に沢山の人の信仰心などによって、疑似的に神に近いものになるという事だ。

認識の集合体である下位神でもあまり生まれにくい。

何故ならば、神に至るほどの信仰心はとてつもない量と質を持っていなければならぬ。

『横』にいくら広がろうが、それでも神の存在に至らしめることはできない。

神というのはそれだけ超越した存在という事だ。

では、何故神に至ってしまったのか。

つまり『横』ではなく『縦』。

長い長い年月で溜まった認識の量が僕の元に来てしまったのだ。

それ即ち『英雄日誌』。

目が見えない僕がオルナに任せた『英雄日誌』。

これが長い時代を経て、沢山の人が僕の『存在』を認識した。

しかも、『始原の英雄』なんて呼ばれていた。

それだけの認識が過去へと遡り、僕の元に戻ってきたら、その『英雄日誌』に溜まった認識は僕へと繋がり、存在が昇華してしまった。

そうだ。僕はそれを聞いた時、思わず手にある『英雄日誌』を破り捨てようとした。しかし、神ゼウスがそれを止めた。

神ゼウスが言うには、僕の『存在』はもはや『英雄日誌』によって成り立っていると、言っても過言でもないらしい。

つまり、『英雄日誌』を破れば集っていた認識は霧散し、僕の存在は消滅してしまうと。そうなれば、『転生』どころではないと。

僕はそれでも構わないと、もう生きていたくないと死のうとしていた。しかし、沢山の神に止められた。

僕は・・・『英雄』になりたかった。

でも、みんなが笑っていられるなら僕は『道化』でも良いと思っただんだ。そんな僕が今、僕を心配してくれている神達を悲しませるのか？

神は永遠の時を生きるから、僕が死んだことなんていざれ忘れてしまうかと？僕は愚かにもそんな事を考えていたのか？

愚かだ。そうだ、あまりにも愚かだ。

ただひと時の感情で自分自身を裏切る所だった。

僕の『大望』が、『切望』が……僕自身の手で踏みにじられてしまうところだった。そんなものじゃないだろう。

ああ、そうだ。そんなものじゃ無いはずだ。

ずっと、僕の心を熱く焦がしていたのはそんなちっぽけなものじゃ無いはずだ。

『英雄』になれなかった？

ならば、もう一度目指そう。

『英雄』を。

今度は『始まりの英雄』ではなく『最後の英雄』を。

そうして、僕は『黒き終末』——隻眼の黒竜を打ち倒した。

正直、『ヴァル』と『アリア』には申し訳ないことをした。

二人に黒竜討伐の手伝いを頼まれたけど、その時の僕は色々やさぐれていたから、僕は参加しなかった。

『傭兵王ヴァルトシユテイン』——アイズの父。僕は彼のことを『ヴァル』と呼んでいる。当時、冒険者のことは傭兵と呼ばれていたため、今の時代で言えば、『冒険者の王』。間違いなく、最強の英雄だった。

『精霊アリア』——アイズの母。僕が愛した唯一の女性『アリアドネ』に似た女性。風の精霊であり、クロツゾの火の精霊と似たような人である。

そして、アイズ。彼女は僕が倒れていた所を拾ってくれた。皆にも歓迎され、一緒に住んでいた。僕は少々——いや、かなり重い目を感じている。何故ならば、僕がその時黒竜討伐に参加していれば、ヴァルもアリアも皆も死ぬことはなかったはずなのだ。しかし、アイズは一度も僕を責める事はなかったし、それどころか今では僕に好意を向けられている。

ヴァル達の黒竜討伐の少し前の事だ。

「アル。良ければだが、黒竜討伐に参加してくれないか?」

「……すまない。僕はもう……何もできないんだ」

我ながら、なんとも情け無い事だ。しかし、ヴァルは残念そうな顔をするも、どこか納得したような顔をしていた。

「……そうか。じゃあ、一つだけ頼まれてくれないか?」

「頼み事?」

「ああ、俺達の娘を。アイズを頼む」

「……何故、僕が? 僕は君達を死地に行かせる張本人だぞ? アイズは僕を恨み続けるぞ。僕は良いが、アイズにとって、はた迷惑な話ではないか?」

「君はやはり、自己評価が低いな。本当のことを言うべきだろうが、親としては認めたくないことだから言わないが」

「? 何のことだ?」

ヴァルの様子にアリアはふつと笑っていて、他の仲間達も少し引いている様子が見られる。

一体何の話なんだ？

その時の僕は疑問でしかないが、今となつては理解できる。

アイズがその時から僕に執着していたということだ。

すでにアイズの中ではヴァル達よりも僕の方に心が向いていたのだろう。

それを見抜いていたヴァルはだからこそ僕にアイズを託したのだ。

そして、ヴァル達は黒竜に傷を負わせ、黒竜を追い払ったが、ヴァル達は漏れなく死亡した。

また、アイズも失踪した。

何故かは分からない。一瞬の内に跡形もなく消えてしまったのだ。

長い年月が経ち、迷宮都市オラリオが創設され、ウラノスから任された『ある事件』の調査のため、神であるが特別にダンジョンに入る許可をもらった。

そこで出会ったのだ。

遠い昔から全く姿が変わっていないアイズに。

約束通り僕は彼女を保護し、建前をいくつか並べて僕が引き取ることにした。

建前は『事件との関連性を鑑みて、大手ファミリアに入れることはできない』『眷属の人数が少なく、眷属全員が高い戦闘能力を保持している』『主神は都市の外に出ることができない』ということ。

本音は『約束』と『神としての直感』だった。
アイズも僕の事を覚えていたためか、僕の所が良いと言ってくれた。
それが、11年前の事だ。

第五話 美しき花には棘がある？

とりあえず、ここで僕の昔話は終わろう。

続きはまた別の機会に。

さて、もうそろそろ三人が帰ってくる頃合いだろう。

出迎えの準備でもするか。

僕は席を立ち上がり、そして自室を出て、リビングへと向かうのだった。

場所は変わり、ダンジョンの18階層——『迷宮の楽園』アンダーリゾート。

その階層の森のある池で三人の美少女が水浴びをしていた。

まあ、言わずもがなアイズ達である。

三人は『深層』からの帰りで、37階層の『闘技場』コロシウムで『特訓』という名の『殺戮』によつて汗をかいたため、流石にその状態で自身が最も愛する主神に近づくのは抵抗があつた。

例え、子供の頃から世話をされ続け、身体の隅々まで知られているとしてもだ。

女性としては愛する男性には自身の綺麗な所を見て欲しいのだ。

あの鈍感神には一生理解できない世界であろうが。

まあ、それはともかく、三人は見た目は女神にも負けることはない程の絶世の美少女なのだ。

何が言いたいのかという、そんな彼女らの生まれたままの姿を一目見ようとむさ苦しいおっさん冒険者共がごぞつて見に行こうとするのである。ああ、いや、訂正しよう。

三人のファンは男性だけに留まらず、女性も多分に含まれている。

すると、何が起こると思う？

アルフィアは「サタナス・ヴェーリオン」を唱え、アイズは黒い「エアリエル」を放ち、メーテリアは魔法で二人の魔法の威力の底上げする。

結果的に言ってしまうえば、そこから一帯が更地になった。

よく考えてみてくれ、アルフィアはレベル7ではあるが、シレンティウム・エデン「静寂の園」を使わなければ、レベル9の魔法に相当する。今回、それを放ったのだ。

そして、アイズの「エアリエル」は黒ければ超攻撃的になる。アイズ曰く、感情によって黒か白か決まるらしいが、攻撃的な感情を詰め込めればそれに応じて風が暗くなるのだそう。レベル5ではあるが、レベル8強の威力に相当する。

そしてトドメのメーテリアの支援魔法。今回使ったのは「英雄讃歌」という、ステータスの補正と体力と精神力の回復を兼ね備えたえげつない魔法であるのだが、補正力は約レベル一つ分まで上げることができる。

ここまで言えば分かるだろう？

むしろ、よく更地で済んだな！ と言えるぐらいである。

ついでに死傷者はいなかった。

本人達曰く、一応手加減したらしい。

いやはや、彼女達の力は未恐ろしいものだ。

まあ、最も恐ろしいのは彼女らの主神のクラネルではあるんだが・・・。
いや、うん、彼は本当に規格外だった。

元々が神に近い状態だったからか、たったレベル5で神へと至るわ、神になって身体能力は一般男性並みに落ちたはずなのに全冒険者に手加減して勝てるわ、下界の子供達と言わずもがな男神も女神も関わらず美の女神顔負けの速さで墮としていくわ、彼は何なんだろうか？ 非常識の化身ではないのか？

特に三つ目なんかは、美の女神ですら簡単に墮とす。

俺が聞いた話ではフレイヤ様はもちろん、アフロディーテもだそうだ。イシユタル様はちよつと知らないが、彼と一夜過ごした後、部屋から全然出てこれなかったという噂があったということは、そういう事なのだろう。

えっ、こわっ。俺でも簡単に絞られるのに。

ん？ 今、色々喋っている超イケメンなお兄さんの神様は誰だつて？

はっはっは！ そこまで言われれば仕方がない。特別に教えてあげよう！

俺の名は——「何してるんですか？ ヘルメス様？」——ちよつと最後まで喋らせてよ、アスフィ。

俺は自身の眷属の一人、「ヘルメス・ファミリア」団長、アスフィ・アル・アンドロメダに視線を向ける。

その視線の先でアスフィは嘆息しながら、死刑宣告を告げる。

「クラネル様に会えて嬉しいのは分かりますが、すっかり仕事をして下さいね。もし、逃げ出すなんて事をすれば、クラネル様直伝のお仕置きをしますから」

「ちや、ちやんとするに決まっているじゃないか、アスフィ。ち、ちなみにお仕置きは何ですか？」

俺は少し動揺しながらも、おずおずとアスフィに尋ねる。

それに対して、アスフィは眼鏡をクイツと上げ、ヘルメスのトラウマを告げる。

『公衆の面前で尻叩き』

あつ、一番心にダメージくるやつ。

トラウマというのは、ヘルメスは一度、クラネルにこれでお仕置きされたのだ。

何をやらかしたかはまた別の話にしておくが、これをやられた次の日から男神にはたくさんいじられ、女神には侮蔑の目を向けられ、街の皆の笑いものされたものだ。それが一ヶ月も続き、心が折れ、トラウマになったのだ。

それ以降、ヘルメスはクラネルの言う事に悉く従うようになり、他の神々から『白兔の犬』なんて言う、あだ名を付けられたとかなんとか。

ヘルメスはすぐにアスフィの前で土下座をし、懇願する。

「しつかり真面目にやりますので、それだけはおやめください！」

「クラネル様から聞きましたけど、本当に効果的ですね……。何があつたんですか……。」

アスフィは情けない己の主の様子を見て、頭痛を堪えながらため息を吐く。

「まあいいです。きちんとやって頂ければ、お仕置きはしませんから。私はリオンに用事があるので、少し出掛けます」

「はい！ 行つてらっしゃいませ！」

アスフィが出て行つた後、ヘルメスは真剣に仕事に取り組み、それどころか、他の眷属達の仕事を手伝う程に暴走していた。

それにより、逆に眷属達に気持ち悪いと悪評を受けたので、アスフィは余程の事以外

はこの脅しを使わないことにしたのだった。

第六話 夢はまだ夢のままが良い

――どうかしたのベル？

――いや、何でもないよアイズ。気にしなくて大丈夫。

――そう？　なら、どうしてそんなに悲しそうな顔をしているの？

――悲しそう、か。やっぱり君に隠し事はできないね。

――やっぱり、それの事？

――そうだね。この本は今までの歴史を全て覆せる程の存在になりつつある。まあ、

だからこそ『物語』としての価値があるんだけどね。

――『英雄試練』は決して貴方を裏切らない。それが『世界の理』であり、貴方の意志の体現でもあるのだから。

――そうなんだけどね。これに関しては僕は恨まれても仕方がないから。

――でも、コレを認知できるのはそう居ないよ？

——いや、できるさ。なんせ、そういう『物語』であり、僕はその『道』の上に立っているからね。

——そつか。なんにせよ私はずっと貴方と一緒にいるから。

——ありがとう。さて、僕に謝罪をする権利は無いかもしれない。されど、僕は『試練』を与えなければならぬ。『世界』よ。聞き届けよ。これは『たった一人の愚者が歩き続ける物語』。

さあ、少年よ。君の返答は如何に。

「うっ、ううん？」

知らない夢を見たが、いつも通りクラネルは起床する。いつも同じように朝早くに起きる。体を起こし、体を伸ばす。ベッドから出て、寝間着からいつもの白ローブへと着替え、部屋を出る。

この時点でもうクラネルは夢の内容は忘れていた。

クラネルは二階から一階へと降りて、リビングにて椅子に座る。

すでに食卓には料理が並べられており、クラネルはキッチンへと目を向ける。そこにはエプロン姿で鼻歌を歌いながら、楽しく調理をしているメーテリアがいた。その美しい白い髪はさながら神の僕と同じようである。青い瞳はアリアドネにそっくりである。

だからこそ思う。メーテリアは僕とアリアドネの子孫であるのだと。アルフィアも同じである。見た目こそ共通点は少ないが、雰囲気など一言葉遣いは置いといて――

アリアドネと似ているのだ。優しい所も厳しい所も。

クラネルは目を閉じて過去を思い返す。

ある日、ゼウスに連れ回され歓楽街まで行きかけた所、ヘラに見つかり僕は保身の為にゼウスを差し出した。その時、「この裏切り者オオオオオオ!!」とか言われた気がするが、全く気にする事なくダイダロス通りへと散歩に行く。

その時のことだった。二人の子供を見つけた。それがアルフィアとメーテリアだ。ダイダロス通りに影響されて装いが少し汚いが、その汚れ以上の高潔な魂が見えて気がした。何より、僕とアリアドネに似た子供達をそのまま捨て置くことなどできなかった。

だから、僕は二人に手を伸ばした。その手に対し、二人は警戒して、特にアルフィアは妹の前に立ち守ろうとしている。しかし、その腕はプルプル震えていて、今にも倒れそうだ。

いや、倒れた。

二人は激しく咳き込み吐血する。最初は周囲の不衛生な環境によるものかと思つたが、二人の体をしつかりと注視するとその真実を理解した。身に余る『魔力』が自身を蝕んでいる。相当に珍しい。『恩恵』が無い身で膨大な『魔力』を発現している。

僕は二人に近づき二人の頭を優しく撫でる。そして、神威を込めた言葉――『言霊』を二人にかける。

『もう大丈夫。僕が来たからもう楽になっても良いよ』

僕の言葉に導かれ、二人の子供は安らかな眠りにつく。

僕は二人を抱えて、自身の家へと運ぶ。

そしてこの後、二人は僕の初めての眷属となる。

僕が回想終える頃には、アルフィアもアイズもリビングの椅子に座っていた。

メーテリアも最後の料理をテーブルの上へと運び、自分も席へと座る。

そして、四人は手を合わせ、

「「「いただきます」」」

今日という一日が始まる。

『物語』は加速する。

これは『たった一人の愚者が歩き続ける物語』。

故に、愚者の周りに仲間はいないという『設定』。

史上最悪の物語が始まろうとしていた。

第七話 始まるわけないだろうこの野郎

始まるわけないだろうこの野郎。

ニヤニヤしながらナレーションする神の頭を後ろに潜んでいたもう一柱の神が思いつき叩く。

おおよそ、神罰が下つたと言つても過言ではないくらいの音が響いたが、流石は神、痛そうではあるがそこまでダメージはなさそうだった。

「いたあ!? えっ!? なにつ? え、誰が僕を叩いたの!?!」

「僕だよ、このクソ神。何僕風にナレーションしてるんだ、『ゼウス』」

クラネルは目の前の爺をチョップする。

ゼウスは叩かれた頭をさすりながら、声の調子を元に戻す。

「あ、あ、あー、ふう。なんじゃ、折角面白くしてやろうと思ったのに」

「だ、ま、れ。必要以上に読者を混乱させるな。何が『加速』だ。僕的には加速どころか逆行してるよ。いつの話してるんだ」

「ええ。読者も気になってるじゃろ？ お前さんの過去、まさに『愚者』と呼ぶに相応しいじゃろ？」

おおよそ、キララツとでも言うべき効果音がゼウスのドヤ顔から発せられる。これにウザいと思わないのはー例え善神のアストレアやミアハ達のような心の広いヤツでもー無理だろうよ。

「うっさい、お前ホントにマトモなことしないな。勝手に進行しやがって。あのサポーターもだが自重を覚えろ。特にあのサポーターには言っておくんだな、これ以上別世界の父メーテリアが嫌がるようなちよっかいを続けるなら、僕の権能を持って性欲のみ剥奪する、と」

「地味に的確な罰を与えていくのお主…。分かった分かった、しつかり儂から言っておく。それでも止まらんようなら好きにやってくれて構わん」

ゼウスは諦めてそう言うが、そもそも被害を完全に無くしたいベルはその答えじゃ満足しなかった。

「へえ？　じゃあもしゼウスが説得に失敗したら、そうだな、ヘラに言っておくよ。『メーテリアがゼウスの子のゴミ虫に言い寄られて困っている』ってね」

「ちよ、ちよ、ちよ、ちよと待つんじゃ!?　ヘラは関係無いじやる!」

急に慌て始めるゼウス。

ヘラにそんな事をチクったら間違いない世界が終わる!

ヘラはクラネルをたいそう気に入っているし、ヘラの眷属達子供ーちなみに当たり前だがヘラの眷属は全員女性であるーは全員大なり小なりクラネルに好意を抱いている。それも、小さくても『親愛』、大きければ『崇拜』。勿論その間には『恋心』も含まれている。

そして、これが一番大きいのだが、ヘラの眷属達はワシの眷属よりも軒並み強いのだ。一応、ワシの眷属で一番強いマキシムはレベル8でありながら、ヘラの眷属のレベル9のあの女帝を差し置いて、『最強の男』と言われている。が、それは通常の戦闘である時

だけだ。

クラネルが絡めば、『女帝』から遠慮が消える。その状態を見た事があるマキシムは「あれは元団長クラネル殿でなければ無理だ。俺にはあの暴君を止められない。女って怖いな、ゼウス」と、遠い目をしながら言っていた。

そんな彼女達がクラネルから依頼を受けてみる。全員嬉々としてこちらを襲撃ーいや、蹂躪してくるぞ!?

自分の欲に正直で、どれだけ酷い目に遭っても『覗きは男の浪漫だ!』とか何とか言つて諦めないゼウスも流石にそれはいやだった。

「わ、分かった! しつかりこちらで躑けておく! ワシの眷属総出でアイツの教育を行う!」

「・・・まあ、良いだろう。ほら、さつさと行くぞ。誰がこんな陰気臭い所にわざわざいなきやならんのだ」

「陰気臭いって・・・。ここ、一応ワシの部屋なんじゃが?」

「なら、自分の部屋くらいさつさと掃除してくれ。いや、そうだな。あのゴミむーサポーターにやらせるか。野郎の、それも爺の部屋の掃除なんて、アイツにとつては最高の嫌がらせだろうしな」

「そろそろワシ泣くぞ?! アイツに部屋を掃除されるくらいなら自分でやるわ! 何故、可愛いメイドちゃんじゃなくて、男に掃除させなきやならんのだ!」

「一体どこにアンタの汚部屋を好き好んで掃除するメイドがいるんだろうな」

どこにもいないだろうよ。そんなメイドの神様のような人。

そんな人が…あ、いたわ。メーテリアがいるじゃん。絶対にゼウスの部屋の掃除なんかさせないけど。

メーテリアは、うん。正直、血縁的に色々複雑なんだよなあ。アルフィアもだけど。なにせ、『僕』はメーテリアの子であり、『私』はメーテリアとアルフィアの先祖に当たるからね。

わあすごーい。字面だけだと意味不明だ。

読者の諸君にヒントを授けよう。

『英雄神話』は終わらない。

世界は英雄を欲し続ける。

世界は一人の『最後の英雄』を見初めた。

世界はその英雄を縛り付けた。その『役割』に。

『英雄神話』は巡り続ける。

その英雄が永遠に存在できるように。